

法, (4) カウンセリング, (5) 精神医学との関係領域——から探索しようとするものである。

結果: 1) 治療的人格変化の生理心理学的指標の研究では, 心拍, 脈波, GSR 等の生理心理学的指標を用いて, 実験的研究 1, 2 を行なった。研究 1 では, 脈波の振幅が緊張解消の指標として有効であることが知られ, とくに自己の感情体験に連続的に注意を向けているときに有意な緊張解消が認められた。これより, 脈波が治療的面接における緊張段階の客観的指標となりうるということが知られた。研究 2 では, 問題青少年がストレス状況下で正常人の心的緊張とは異なった様相を示すことが, 心拍変化から知られた。

2) 臨床場面におけるテストの有効性の研究では, 比喩的イメージを介して自己像や他人像を表現させるテスト IMQ (Image Question) を作成し, これを用いて, 正常者, 神経症者, 精神分裂病者の自己像, 父親像, 母親像が分析された。その結果, 各群は互いに特徴的に区別されることが判明し, IMQ の臨床的有用性が示唆された。

3) 遊戯療法の効果判定に関する研究では, ①プレイの主題, ②プレイにおける自我関与の度合, ③プレイでみたまわっている発達の心理社会的ニードの水準, の 3 つに関する遊戯療法過程尺度が作成され, 尺度の信頼性の確立と臨床例への適用がこころみられた。また, 精神薄弱児の遊戯療法過程尺度が作成され, 精神薄弱の心理療法過程の特徴が分析された。

4) カウンセリングの効果判定に関する研究では, ①カウンセリング過程の進展ならびに深化に関する側面, ②カウンセリングによる人格変化の評価に関する側面, ③カウンセリング過程で話題にされた“夢”の内容分析の 3 点に焦点をあわせて検討を加えた。その結果, ①クライアントの側の深まりとカウンセラー側のそれとに相関がみられ, ②中断するケースは, クライアント側とカウンセラー側の意識体験にずれがある, ことなどが明らかにになった。

5) 精神医学領域における心理療法の効果判定に関する研究では, 患者のタイプと心理療法のタイプの関連性を分析するために, 大学生の対人恐怖症者 (重症度の一致した) 15 名をえらび, 「洞察」心理療法 (より多く内面へと眼をむけさせる) と「生活」心理療法 (より多く外面からの調整に重点をおく) を選択施行した。この経験から, 患者のタイプと心理療法に関して, 二者択一の治療仮説を得た。

研究発表

1. 梅本堯夫・河合隼雄・斎藤久美子他, IMQ によ

る自己像把握の試み, 日本心理学会, 第 33 回大会抄録集, 1969.

2. 梅本堯夫・河合隼雄・斎藤久美子, IMQ による両親像分析のこころみ, 日本教育心理学会第 11 回大会抄録集, 1969.

3. 梅本堯夫・河合隼雄・斎藤久美子他, 正常群と臨床群における自己像と両親像の研究——IMQ——による, 日臨心第 5 回大会, 発表抄録集, 1969.

4. 田畑治・倉石精一・鎌幹一郎, 心理治療関係の進展と治療的人格変化について, 日臨心第 5 回大会抄録集, 1969.

5. 田畑治, 心理治療関係における治療的要因の一考察, 心理学評論, 1969, 12, 89-107.

6. 田畑治, 面接初期に中断した場合の心理治療関係の一分析, 臨心研, 1969, 8, 11-23.

7. 千原孝司, 精神病者の迷路通過行動特性, 京都大学教育学部紀要, 1970, 16, 48-57.

8. 東山紘久他, 精神薄弱幼児の遊戯治療と訓練の過程, 臨心研, 1970, 9, 103-113.

学生の生活と意識構造に関する比較研究

研究代表者 肥田野直 (他 12 名)
(東京大学)

現在の大学の場において学生の直面している諸問題を, その社会的背景との関連のもとに, 学生の生活と意識構造の分析を手がかりとして, 総合的かつ客観的に把握することを目的として, この総合研究が行なわれた。

研究分担者は, 肥田野直, 佐治守夫, 林仁忠, 越智浩二郎, 小野周, 村上泰亮, 折原浩, 見田宗介, 鈴木祐久, 鮑戸弘, 中谷和夫, 土橋信男, 杉本敏夫の 13 名である。

研究課題は, 次の諸点である。

- (1) 在学中の学生が, 直面する問題をいかなる条件のもとに, いかにして克服して, 専攻や職業と取り組むか。
- (2) 在学中の学生の大学・学問観, 社会観, 人生観などは, どのように変化するか。
- (3) 特に現代の社会問題, 政治問題に対して, どのような意識と態度をとっているか。

具体的な研究方法として, 質問票による意識調査, 面接, 聴取などの方法を併用し, 追跡的な分析, 諸大学の学生の比較などを行なった。

主要な研究成果は次のとおりである。

(1) 一般学生を対象とした質問票調査によると、国立二期校や私立大学の学生は、国立一期校とは、かなり異なる意識構造をもっていることが示された。すなわち、大学選択の動機を見ると、一期校においては、積極的な理由が上位を占めるのに対し、二期校においては、副次的な理由もしくは消極的理由しか見出されない。また、大学間に学生による格づけが存在し、それが志望順位と密接な関係をもつことも示された。ただし、大学への期待については、専門的知識・技術の評価に多少の差があるほか、一般的傾向はかなり一致している。なお、各校の学生気質と学内での諸活動との関係、出身階層と大学・学問観や人生観との関係などに、国立、私立の間の相違が反映することが示された。

(2) 事例研究によると、高等学校時代および大学時代前半における交友関係から準拠集団を形成しており、それによって彼らを典型的に把握できることが明らかになった。その理論図式の構成を試みた。

(3) 予備調査の段階で、折から進行中の大学紛争の中で、学生は強い衝撃を受け、大学・学問観や生活意識に重大な変化が生ずることが知られた。そこで、特定大学の学生（含大学院学生）を対象に、質問票調査を行なった。学生の社会問題（特に紛争等）への態度は、こうした具体的事件をきっかけとして顕在化する。すなわち、当初、中立・無関心の態度をとっていた者たちは、紛争の経過と共に、積極的態度、消極的態度のいずれかを取らざるを得ず、運動への参加についても、両極に分解することが示された。高学年ほど、また特定学部の学生において、消極的態度が見られた。また、社会問題への態度は、学生の準拠集団とも関係がある。すなわち、特定の派の支持者は、一貫した態度をとる。現状に対しては批判的であり、しかもどの派にも属さない者たちが、無党派準拠集団を形成し、紛争の経過に大きな影響を与えた点が注目された。なお、学生の出身階層と行動への参加の間にも、密接した関係が見出された。

今回の大学紛争のため、対象学生の選択と質問紙の回収に大きな支障があったことを付記する。

聾児の教授法改善に関する心理学的研究

研究代表者 小川再治（他9名）
（工学院大学）

他の特殊教育部門に比べ、科学的教育法探究の研究が

乏しかった聾教育界が、今後より進歩するための参考資料を提供する目的で、本研究を計画した。本研究は4部門から成り、最終的に各部門の成果を持ちよって、いろいろの知見をまとめ上げる予定であるが、現在はまだ各部門別々に研究を進めつつある。以下、各部門の研究成果を概括して報告する。

I 聾児の知能、性格の個人差に関する基礎的研究

聾児に科学的な教育を行なう基礎となる、妥当性、信頼性の備わった知能や性格の測定法は、まだ確立していない。この測定法確立への寄与を目標とし、最初研究対象を知能にしぼった。従来からいわれているように、聾児に団体知能検査を用いれば、能力以下の結果が出てくるし、動作性個人検査を用いれば、抽象的側面の知能が測定しにくいというジレンマがある。小川再治はアメリカでは、(a) ヒスキーンプラスカ検査、(b) ライター検査という2つの個人動作性検査が、前述のジレンマを比較的解決しているという情報を得たので、(a) を日本の聾児に適用してみた。現在まだ数十例の資料しか得ていないが、アメリカでいわれているほどの効果は現われていない。現在栃木聾学校でさらに資料を増しつつあり、あわせて団体式知能検査も試みている。次の段階として下位検査分析、ライターの施行を計画しており、得た資料の分析により、上述のジレンマを破る突破口を見出したいと考えている。また今後性格検査の検討も試みる予定である。

II 聾児の能率的言語教授法の検討

従来の言語教授法の能率を、教育工学的機械の導入によって向上させ得るかを検討する。小川再治が1967年オハイオ大学勤務中に実施したプログラム学習のティーチング・マシンによる語彙形成研究からヒントを得た実験を、日本の聾学校幼稚部で行なったところ、特に高知能の生徒に効果を得た。ティーチング・マシン以外の教育機械の有効性についても、今後検討の予定である。以上のI・IIは主として小川再治・中村秀が中心となっていたが、III・IVは栃木聾学校スタッフが主になって実施したもので、まだI・IIとIII・IVの間に関連づけをする段階に到っていない。

III 聴能率訓練法の検討

現在日本聾教育界で用いていない指文字を、栃木聾学校の聴能訓練授業の中に導入した。導入しなかったところの生徒よりも、音韻表象の形成、口話能力の向上、自我関与の増進などの効果がみられた。今後何らかの方法で統制群を設ける必要を感じている。（後述する困難性はあるが）

IV 同時法（同時に2つ以上の方法を用いる教授法）